

- 14) 高木菊三郎 (1931) : 日本地図測量小史 (古今書院), p.60~61.
- 15) 司馬江漢 (1811) : 春波樓筆記, 百家説林卷五 (明治廿四年, 1891 所収, p. 69~70. なおこの部分は岡田武松 (1933) : 測候瑣談 p.4~5 に引用されている.
- 16) 日本学士院編 (1964) : 明治前日本物理化学史所収気象編, 同書, p.431~478, この項の執筆者は岡田武松.

## 根本氏へのお答え

鯉 沼 寛 一

本誌1月号に“日本の気象観測の始まり”, という小文を書いたところ, 根本氏から8項目に亘るコメントがありましたので, それについてお答えします. なお, お答えの中の項目の番号は同氏のコメントに合せてあります.

### A. 1項について

藤原の“日本気象学史”からの引用は, 原著を見ずにノートと記憶によった私の誤りです. その上, 校正も疎漏のため脱字が1字あり, “舟要術”は“船行要術”と訂正さるべきでした.

### B. 2項, 4項について

温度計の渡来 (2項), 温度計と気圧計の製作 (6項) についてはもっと早いものがあり, そういう先人の仕事や創始者の業績を無視してはいけな, という根本氏の意見に反論するつもりはありません. だが, 私の小文の目的は温度計や気圧計の歴史を書くことではなく, 日本の気象観測の始まりについて書くことでした. ただ, 気象観測の始まりを問題にするには, 気圧計や温度計がいつ頃日本に伝わり, 日本では誰がいつ頃製作したかに一言触れた方がよからうと思ひ, まえがきに当る第1節に簡単に書いたのです. したがって, 私の気についていた点だけに止め, 資料は探しませんでした. ただし, このお答えを書くに当り, 気圧計や温度計の歴史については根本氏が気象 (1962年, 1~5月) に連載し, その一部は私も前に読んでいたことに気付きました. 手近の資料を忘れていたのは, 私が科学史には素人だったからでしょう.

### C. 3項, 7項について

コメントの3項では, 私の小文の第4節の始めの記述について“気圧計は天気儀, 温度計は気候儀と昔は一般的に呼ばれたように書かれています, 果してそうでしょうか”, とあります. もし, そのように取られたなら私の文がまづかったのです. 私がそこで言いたかったのは, 天気儀や気候儀という名称があるなら, 蒙気差や山

の高さだけでなく, 気象そのものの測定を目的とした観測があってもよさそうなものだ, という気持で書いたのです. 私は以前に気象業務の始まりについて気象 (1966年, 10~12月) に書き始め, 都合により3回で打ち切ったのですが, その第1回には天気驗器, 天変考, 驗気儀, 寒暖儀などの名称を, 主として根本氏の書いたものから引用して書いておきました.

コメントの7項で根本氏は, 私の引用した堀内の“富士山の高さ” (天気, Vol.1, No.2) について, “小生の調べた限りではこれは全く想像で, 何等の証拠も見付かりません”, と記し, “小生はこのような記述を鯉沼氏のように安心して引用することはできません”, と言っています. しかし, 私も堀内の記述は少し明確を欠くと思ったので, 安心して引用したわけではなく, “途中箱根山で気圧計を用いてその高さを測定したという”, というように断定は避けつつもでした.

ところで, 根本氏の“高さによる気圧の遞減と日本における晴雨計の歴史” (気象, 1962年, 5月号) を見ると, p.405の右下から5~4行に亘つて上記の堀内の記述を引用し, “二宮は文政9年 (1826) 2月シーボルト府の折, シーボルトに従って箱根の高さを約1000mと出した”, とあります. したがって, 以前には根本氏は安心して堀内の記述を引用したのではないのでしょうか.

### D. 5項, 6項, 8項について

これらの項目で根本氏が指摘した資料は, 私の小文の目的から見れば当然引用すべきもので, それを落したのには私の手ばかりです. 同氏の付記によると, 6項と8項に関する資料は, 一般に余り知られていないようで, 勿論, 私も知らなかったのです. しかし, 5項の長崎におけるツンベルグの観測については根本氏が気象 (1962年, 5月号) に書いており, そんな手近のものを見落したのは私のミスでした.